

デザインスクール in 沖縄 実施報告書

2017年1月23日 十河

1. 概要

昨年に続き、4回目となるデザインスクール in 沖縄を開催した。本スクールの対象は主に1年次の履修者であり、ファシリテーションの習得を一つの目的とし、合同でワークショップを行うことで、新しい問題の発見と解決策を見いだす機会としている。

第1回のテーマは「観光」、「おもてなし」、第2回のテーマは「健康」、「雇用」と若干抽象的な側面もあったが、第3回のテーマは沖縄市の「こどもの国の活性化」「図書館と商店街の連携を通じた活性化」で、具体的なテーマとして沖縄市の抱える実問題に挑戦した。第4回は、今日もなお続く沖縄の深刻な米軍基地問題を題材とし、移設後の「普天間飛行場の跡地利用」について、沖縄の新たな発展につなげるためのアイデアを検討した。

昨年同様、参加者がワークショップにおいてより効果的なファシリテーションを実践できるよう、事前にファシリテーション講習を実施した。また、学習効果を高めることを狙い、スクール終了後に参加者自身による振り返りを行った。

2. スケジュール

事前に京都にて半日のファシリテーション講習を実施し、ファシリテーションの基礎を習得した。沖縄での合同ワークショップは例年11月の三連休を利用して実施しているが、今年は連休がなかったため、京都大学、琉球大学の双方の授業に影響のないよう、京都からの移動は金曜日の夜に行い、ワークショップは土日の2日間で実施し、最終発表会を月曜日の夜に行った。主なスケジュールは次のとおりである。

日程	概要
11月5日(土) 午後	ファシリテーション講習(十河、中川、平本) (於 京都大学デザインイノベーション拠点)
11月18日(金)	夕方、京都から関西空港へ移動し、空路で沖縄へ (機内にてオリエンテーション資料配布) 那覇空港 21:55 到着、那覇市内宿泊
11月19日(土)～ 11月20日(日)	京都大学－琉球大学合同デザインスクール(於 琉球大学)
11月21日(月)	日中、ベンチャー企業等2箇所訪問 夜、合同デザインスクール発表会(於 琉球大学) ワークショップの振り返り(十河)(於 宿泊先ホテル)
11月22日(火)	フィールドワーク(那覇市周辺) 夕方 那覇空港から伊丹空港へ。帰京

3. プログラム

3.1 ファシリテーション講習（京大のみ）

11月5日（土）13:30～17:40（於 京都大学デザインイノベーション拠点）

概要：合同デザインスクールの2週間前に、デザインプロセスとデザイン手法、ファシリテーション、インタビュー、フィールドワークについて基礎的な講習を実施した。昨年の本スクールのほか、国内外で実施しているさまざまな活動における履修者のフィールドワークの様子を見ると、基礎的なスキルが不足していることがうかがえたため、今回の講習ではフィールドワークについての講習をさらに追加した。また、特に第1回の本スクールの参加者は現在のようなファシリテーション講習を受講していないため、今回のスクールに参加しない履修者にも告知し、4名が加わった。講習には計14名が参加した。

(1) 講義「デザインとは」（十河）

問題発見と問題解決のための基本的なデザインプロセス（発散・収束）、ブレインストーミング、強制発想、親和図法などの基本的なデザイン手法について講義と演習を行った。

(2) 講義「ファシリテーションとは」（中川）

ファシリテータの心構え、および、傾聴、質問の仕方などファシリテーションの基礎的な手法やツールについて講義を行った。



講義の様子

(3) フィールドワークについて（平本）

フィールドワークの概要、フィールドワークでの観察や記録の仕方などについて講義を行った。

(4) 講義「インタビューについて」（中川）

半構造化インタビューの概要と手順、質問の仕方など、インタビューの基礎について講義を行った。



講義の様子

(5) テーマの説明（十河）

今回の合同デザインスクールのテーマ（後述）について簡単な説明を行い、当日の自チームのワークショップのプログラムをデザインすることを、当日までの課題とした。

(6) 沖縄の基地の背景の学習（講習終了後、任意参加）

沖縄の米軍基地の背景を事前知識として学ぶことを目的として、番組を鑑賞した（希望者のみ参加）。第二次世界大戦の終盤に米軍が沖縄に基地を建設した当時の様子や、沖縄の日本への返還に至るまでの歴史を映像で学んだ。

3.2 京大ー琉大合同デザインスクール

11月19日（土）～20日（日）、21日（月）夜（於 琉球大学地域創生総合研究棟 1階）

概要：沖縄県や宜野湾市では、普天間基地の返還後の跡地利用について計画・討論が行われている。さまざまな調査を経て中間とりまとめを終えており、現在は具体的な利用計画の策定が進められている段階である。本スクールでは、今日もなお続く沖縄の深刻な基地問題を題材とし、宜野湾市を中心とする現地の状況を理解した上で、改めて学生の視点から普天間飛行場の跡地をどのような目的でどう利活用したらよいかをデザインした。参加者は5～6名で1チームとなり、計6チームに分かれてグループワークを行った。デザイン学履修者はファシリテータとして各チームの議論をリードした。



グループワークの様子



フィールドワークの様子



発表会の様子



参加者全員で記念撮影

発表タイトル：

グループ1：ちゅらむい 海と夕日に映える街、普天間

グループ2：はくぶんベース FUTENMA

グループ3：普天間アグリシティ

グループ4：ギノワンシティプロジェクト 2035

グループ5：ちむぐくる×まちつくる

グループ6：新・チャンプルー文化 沖縄起業と文化(カルチャー)が交差する街（優秀賞）

スケジュール：

11/19（土）（1日目）	
9:00－9:30	受付
9:30－9:40	オープニング・挨拶
9:40－10:20	基調講演 1「普天間飛行場跡地利用について」 塩川浩志氏（宜野湾市政策部まち未来課 係長）
10:20－10:40	基調講演 2「普天間基地跡地のポテンシャルとスケール感」 小野尋子氏（琉球大学工学部環境建設工学科 准教授）
10:40－11:00	休憩
11:00－12:00	グループワーク 1回目
12:00－13:00	昼食
13:00－18:00	グループワーク、フィールドワーク
11/20（日）（2日目）	
9:00－18:00	フィールドワーク、グループワーク、プレゼン準備
18:00－19:00	懇談会
11/21（月）（3日目）	
15:30－18:30	発表準備最終調整
18:30－20:00	発表会（司会：當銘大樹（株）がちゆん 取締役／琉球大学法文学部）
20:00－20:20	講評 小野尋子氏（琉球大学工学部環境建設工学科 准教授） 呉屋勝広氏（ねたてのまちベースミーティング 会長）
20:20－20:30	表彰式、クロージング 山田孝治氏（現地実行委員長／琉球大学工学部環境建設工学科教授）

3.3 ベンチャー企業訪問

合同スクールの最終発表会が行われる 3 日目の夜までの時間を利用して、沖縄を拠点として活動するベンチャー企業等を訪問し、第一線で活躍する経営者と議論を行った。

(1) アクシオヘリックス株式会社

(那覇市西 2-16-3 屋島組本社ビル 2 階 <http://www.axiohelix.com/>)

アクシオヘリックスは、沖縄を主な拠点とし、海外にも事業展開している IT ベンチャーである。創業者のシバスタラン・スハルナン社長から、創業にまつわる話や、スーダンのドクターカーのプロジェクトについての話を伺った。後者のプロジェクトは、ODA によって提供されたドクターカーに搭載された医療機器のメンテナンスを、スーダンで新たに設立した会社で行っている。最近では国の補助金に頼る、リスクの低い仕事が多くなっていたため、ベンチャースピリットを大



議論の様子

切にすべく、昨年頃から方針転換し、国内外で新しい事業を立ち上げているという。

(2) STARTUP CAFE KOZA

(沖縄市中央 1-7-8 内 <http://startup-cafe.okinawa/startupcafe-koza/>)

スタートアップカフェコザは、起業創業を志す人をワンストップで支援する拠点として開設された。代表の中村まこと氏から、開設の目的や役割等を伺い、併設のコザショアスタジオや沖縄ミライフクトリーを見学した。ここでは会社員、学生、主婦などがだれでも無料でコンシェルジュに相談でき、起業などについてアドバイスや専門家の紹介を受けられる。また、併設されたコザショ



デモの様子

アスタジオ、沖縄ミライフクトリーを利用してプログラミング学習によるスキルアップや、3Dプリンタなどを使った先端のものづくりができる。近隣の若手革細工職人が3Dプリンタを使って新しい商品開発を進めているといった事例があるという。

4. 参加者

【京都大学】

<履修者> 11名 (内9名ファシリテーション講習参加者)

<教職員> 6名

【琉球大学】

<学生> 20名

大学院理工学研究科情報工学専攻 3名 (M1)

工学部情報工学科 12名 (B4×2名、B3×2名、B2×2名、B1×6名)

琉球大学法文学部総合社会システム学科 3名 (B4×1名、B3×1名、B1×1名)

沖縄国際大学地域行政学科 1名 (B4)

沖縄国際大学 総合文化学部 社会文化学科 1名 (B3)

<教員他> 5名

教員 3名、技術職員 2名

【その他】

社会人協力者 4名 (教員 1名、企業 1名、公益法人 1名、行政 1名)

5. 参加者の所感

本科生および教職員に次の内容について意見を求め、計 13 名から回答を得た。

- (1) デザインスクール in 沖縄（ファシリテーション講習含む）での活動内容と所感（学生は匿名、教職員は実名で Web で公開）
- (2) 本スクールをファシリテーションの学習と実践という側面から見た意見（非公開）
- (3) 今回のテーマ「普天間飛行場の跡地利用」、今後どうすべきかについての意見（非公開）
（2013 年は「観光」「おもてなし」、2014 年は「健康」「雇用」、2015 年は沖縄市の「こどもの国の活性化」「図書館と商店街の連携を通じた活性化」）
- (4) 今回、事前にチーム作り（自己紹介等）のためにチャット（Slack）を用意したが、それについての意見（非公開）
- (5) その他コメント（非公開）
- (6) 日程について（非公開）

以下では公開部分（1）の回答について掲載する。

（教育学研究科 博士 2 年）

今回は 2 回目のデザインスクール in 沖縄に指導役という立場で参加させていただきました。M1 の皆さんが各班の活動をしっかりとリードしていたので、特に指導する必要もなく、安心してみられました。自分が M1 のときは、事前のファシリテーションはなく、ファシリテータも先生方が担うという形でした。その時と比べて、今回は M1 の皆さんにファシリテータという役割が明確に与えられており、ワークショップのスケジュールも事前に考えてくるという形になっており驚きました。デザイン学での FBL/PBL やワークショップの参加経験すら少ない中で、グループをコントロールすることはかなり大変だったと思いますが、その分学べることもたくさんあったと思います。最後の振り返りの自己採点で、高い点をつけた人は今回の経験を自信として、低い点だった人は減点分を伸びしろとなる課題として、今後のデザイン学の活動にいかせるだろうと感じています。

今回のデザインスクールを客観的に見た感想としては、テーマがこれまでと比べて、デリケートなこともあり、既存の利用計画や実現可能性を考慮しなければならないという空気が少なからずあったのがもったいなかった気がします。これにより、自由で柔軟な発想がいくらか制約され、デザインスクールというよりも都市計画のワークショップに近かったように思います。アイデアを発想する、集約するというプロセスを実行し、学ぶということがしやすいテーマ設定ないしは、雰囲気づくりをした方が、デザインスクールとしてはより良いと感じました。

（教育学研究科 修士 1 年）

5 日間、飛ぶように過ぎていったという印象です。特にメインである琉球大でのワークショップ+発表の 2 日半は本当にあつという間でした。今回は例年よりスケジュールがタイトになりましたが、反対にテーマは例年よりも難しくなっています。ファシリテーターとしてもまだ勝手がわからず、これまでと違ってテーマの中で解決すべき問題も設定されていな

かったので、1日目はなかなかグループ内で議論の方向性が定まらず苦勞しました。2日目
でどうか議論がまとまったのは、「何が欲しいか」ではなく「沖縄に存在する問題のうち、
どれを解決するか」を考えるように方向性を定めたからだと思います。デザイン学プログラ
ムの理念に則って自分たちで新たな問題を発見するという挑戦もしてみたかったのですが、
残念ながら時間が足りませんでした。それ以外にも、やり残してしまったことや上手くファ
シリテーションできなくて悔やんでいることはたくさんあります。ですが、最後にグループ
のメンバーから「こういうワークショップは楽しい」という言葉がもらえたことは大きな成
果だと思っています。そう言ってもらえて初めて、ファシリテーターとして自由に議論でき
る雰囲気づくりに苦心した2日間は無駄ではなかったと実感できました。

(工学研究科 機械理工学専攻 修士1年)

事前にファシリテーション講習を実施していただいたおかげで、理論としてファシリテ
ーションとはどうあるべきか、またフィールドワークの良い進め方などを勉強することが
できました。しかし、実際にファシリテーションを行うとなると、勉強した内容通りにうま
くいかず、理論と実践の間には大きな隔たりがあるなと感じました。ワークショップという
ものは通常の会議のようにフェーズがかっちり決まっているわけではなく、進行状況で適
宜流れを変える、またファシリテーターとして議論が進むよう場にアクションを起こす必
要があります。この状況を読んだ即自的な働きかけがうまくいかず、考え込んでしまい進行
が止まってしまったり、またメンバーのファシリテーターに対する信頼感を失ってしまい
という状況に陥ってしまいました。ファシリテーション講習において、10分程度、実際に
練習してみるという機会がありましたが、より長期間の練習ができたならよかったかなとい
う印象です。また、ワークショップの計画について、事前に先生や先輩などから意見を頂け
る形式だと良いかなとも思いました。

(情報学研究科 知能情報学専攻 修士1年)

デザインスクール in 沖縄では、沖縄の学生とチームを組み「普天間飛行場の跡地利用」
というテーマでワークショップを行いました。フィールドワークやチーム内の議論を経て、
最終的に跡地利用に対して提案を発表しました。京大デザイン学履修生は、チームの力を引
き出せるようファシリテータの役割を持った参加者として活動しました。

ファシリテータそして一人の参加者としてデザインスクール in 沖縄では、チームがメン
バーの背景を活かし、まとまって提案へと進んでいくことの面白さを感じることができま
した。チームのメンバー皆が積極的に動き、チームとして合意を得ながら各個人の力を活か
した提案ができたことは、ファシリテータとして嬉しくまた楽しかったです。また一人の参
加者として、テーマを中心として意見を交換しあうことで沖縄の学生をはじめとしたメン
バーの様々な考えに触れることができ、これまでとは違った視点をいくつか手に入れるこ
とができました。

ここからは2つの観点でより詳細にデザインスクールを振り返ってみます。

まずグループワークという観点から振り返ります。今回はチームとして、各メンバーの意

見をぶつけてそれをふまえて全員がなんとか合意し次の段階へ進む、というプロセスができていたと考えています。意見をぶつけることに関しては、沖縄の学生が積極的にアイデアを出してくれたことが大きかったです。例えば、丘という地形の活用を議論する際に高台からの視点も含めて提案してくれたり、フィールドワークの際に嘉数高台だけではインタビューが十分にできないということで沖縄国際大学にも訪れることを提案してくれたり、意見収束の際に言葉だけでなく絵を描いて各自の案を可視化することを提案してくれたり、と提案の中身に加えてワークショップの進め方についても積極的に意見を出してくれました。相手の意見を傾聴して合意を形成することに関しては、特に京大側がファシリテータとしてそれぞれがそれぞれの意見を聞くことを大切にする環境を作れたのではないかなと考えています。次の活動に移る際に順番にそれまでやった内容を振り返ってもらうというワークショップ形式や、全員の意見を確認しながら調整しつつ合意を形成していくワークショップ運営が、今回はうまくいったのではないかと思います。

次にテーマという観点から振り返ります。今回自分たちのチームは、テーマに対して現状の案と自分たちの視点を、バランスをもって見ることを大切にしていました。基地の跡地利用という社会の大きな実問題に対して、どういった課題があるのかそして現状の案がどういった考え方をしているのかということ把握しようと努めました。そして、現状の案を把握すると同時に、自分たちならではの視点、切り口を大切に、フィールドワークやチーム内の議論を進めました。基調講演のあと各自どう考えているか現状認識の際に、自分も含めて講演やこれまでの資料に少し圧倒されていた様子が見られました。そこから話し合っていく中で、視点を別のところへ置いてみるといった先生方のアドバイスもあり、現状の案はふまえつつも自分たちの視点とバランスをとってこのテーマに取り組もう、という流れがここでできたことでこのあとの作業がうまく進んでいったと考えています。そして高台からのフィールドワークやそこから各自が感じたこと、提案へのアイデアについてチーム内の議論を進めていく中で、自分たち独自の視点として、普天間の丘という景観を切り口にすることが出てきました。その後は現状の案を把握した上で、自分たちの視点を大切に、バランスを取りながら提案を考えることができ、自由な発想と責任を併せ持った提案ができたのではないかと考えています。

このデザインスクール in 沖縄では、ファシリテータの役割を持った参加者として沖縄の学生とチームを組み、基地の跡地利用というテーマに対してワークショップを行い、提案を発表する、という貴重な体験ができたと考えています。ファシリテータそして一人の参加者として、チームが各メンバーの力を活かし、まとまって提案へと進んでいくことの面白さ、そしてまとまったチームの力強さを感じることができました。一緒にワークショップを行ったチームの皆さんに感謝しています。

(情報学研究科 社会情報学専攻 修士1年)

活動内容としては琉球大学の学生の意思決定がなるべく容易になるように、課題を進めていくための枠組みを作れるよう努めました。特に印象に残ったこととしてあげられることは、グループの雰囲気の日数を経るごとに変化していき、最後のリフレクションでは目に

涙を浮かべるシーンがあった点です。

(情報学研究科 社会情報学専攻 修士1年)

●ファシリテーション講習について

ファシリテーションのパートはよく勉強になったが、デザイン手法についての講習は、他のイベント等でもよく言われている既知のことが多かった。事前課題として指定されていた書籍との関連をより意識した講習がなされれば、沖縄当日までの自身での勉強やリサーチもしやすかった。

●琉球大学とのワークショップへの参加について

事項でも述べているが、テーマ策定がかなり面白いもので、参加者は能動的に議論に加わることができた。プレゼンテーションや講義後に質問がよく飛んでいたことも、参加者が能動的に参加していたことを示していると思う。フィールドワークについて、普天間基地を「とりあえず見に行く」という班が多かったように、ワークショップの議論を踏まえてフィールドワークに行っていた班が少なかったように感じている。議論を踏まえて、それぞれの班にあった場所に行く方が、よりワークショップを有意義なものにするのではないか。また、ワークショップ後の順位付けの投票は必要なかったと思う。ワークショップの性格と、テーマから言って、順位付け出来るものではなかったと思う。それぞれのブースで説明を受けるだけにとどめた方が良かったと思う。発表の時間が厳格に定められたプレゼンテーションであり、あまり他班の内容が理解できなかった。時間を厳格に定められたプレゼンテーションを、周到に準備するほどの時間的余裕はなかった。

●ベンチャー企業訪問

訪問先は、アントレプレナーシップをくすぐられる素晴らしい会社および経営者だった。

(情報学研究科 社会情報学専攻 修士1年)

沖縄の内陸をまわることができ、プライベートの観光ではおそらく行かないであろう場所を、フィールドワークでまわることができ良い機会になった。特に印象に残ったのは、沖縄の車社会である。人口密度が高く、ただでさえ敷地が狭いのに関わらず、琉球大学の駐車場など、敷地の大部分が駐車場となっていた。道も極端に狭いところがあり、危険性を考慮してフィールドワークを断念する箇所も存在した。公共交通の必要性を感じた。普天間基地を生で見ることができたのも貴重な経験だった。フィールドワークを通して琉球大学の学生や、道を歩く一般の方から現地の方の価値観、考え方を知ることができいい経験となった。

(情報学研究科 社会情報学専攻 修士1年)

活動内容としては沖縄の学生と普天間基地の跡地利用について議論し、自分たちの提案をするというものです。沖縄の普天間周辺の施設等に赴いて、インタビュー調査などを行いました。その内容をもとに議論を深め、最も良い跡地利用は何なのか深く考え議論し最終発表の資料にまとめて発表しました。沖縄の学生が普天間の基地に関して想像以上に深く考

えていて驚かされました。

個人的に面白かったと思う点としましては、沖縄の人たちにアンケートをとって見てわかったことの中で、普天間基地があることに対しての問題意識はあるのだけれど、実際に移転したときにどうしたいかと言った明確なビジョンのようなものを持っている人たちは少ないということです。その為普天間基地の移設後どういったものを沖縄の人たちが問題視することになり、どういった問題を解決していくかということ聞き出すことが難しかったです。そうした中で琉球大学の学生たちは、上手にインタビューをし、いろんなことを聞き出せていたので純粋にすごいと感じました。そうした中の議論で、宜野湾では交通量が多く普天間基地を迂回しなくてはならないため、渋滞が発生したり、本州に比べて輸送コストなどがかかることにより野菜の値段が高くなっていることなどが問題であり、それらを解決していくまちづくりをすることを目標とした提案を行いました。個人的には良い提案だと思いましたが、大変短い期間であったため中途半端な議論で終わり、発表もその状態で行ってしまったのでそこが残念でした。ファシリテーション能力の不足を感じる部分でもありました。

(情報学研究科 社会情報学専攻 修士1年)

ファシリテーターは、ワークショップ構成時に発散と収束のバランスを十分に考慮する必要があるということ学んだ。今回の構成には、大きなテーマの中で視点を狭めすぎてしまうことを恐れ、収束の過程を十分に取り入れられなかった。結果として、思考や議論の核があやふやになり、拡散の過程すらも妨げてしまったと感じる。

また、参加者に知識ではなくアイデアを出してもらうことの難しさを痛感した。特に異文化の地においてワークショップを行う際には、圧倒的な知識量の差のために、知識とアイデアの区別が難しい。「洞窟を泡盛の保存場所として活用する」などは先行事例のある「知識」であって「アイデア」ではないのに、それが「知識」であることに気づかず、「知識」から「アイデア」に発展させられるよう誘導できなかった。ただ、知識だと気付いたとしても対応ができたとは思えない。この手法については今後も勉強していきたい。アイディエーションの種として沖縄を捉えるのであれば、すでに考え尽くされている「観光」の観点は排除した方が面白かったかもしれない。

ファシリテーターとしての反省点は数多くあるものの、毎晩海ぶどうやジーマミー豆腐、そしておいしい泡盛を味わいに夜の国際通りに攻め入ることができて、総じて楽しかったと言える。非常に美味しく大感激した豆腐餛飩が本土に戻って食べてみるとなんだかいまいち美味しくなかったのが印象的である。オリオンビールといい、豆腐餛飩といい、現地のもものは現地で食べるからおいしいのであって、その土地を離れると不思議と土地の魔法が解けて本来の美味しさを失ってしまうのだなあ実感した。豆腐餛飩に合計2千5百円もはいたというのに、お土産としては大変不評であったのが面白かった。

(情報学研究科 システム科学専攻 修士1年)

まず初めに、今回のデザインスクールを通してファシリテーターを行う際、次の4点が

重要であると実感しました。①ファシリテーターが自身の意見を強く主張しすぎないこと。②直面している課題や議題に対してチームで共有の認識を持つこと。③参加者が意見を出しても否定されないようリラックスして発言できる環境を作ること。④タイムマネジメントを行うこと。

所感としては、ファシリテーションに関する事前学習の段階ではこれらを理解しているつもりでも、いざ実戦となるとできていないことが多く、ワークショップ終了後のフィードバックが自分の振る舞いを見つめ直すとても有意義な時間となりました。(盛り上がっていると、このワークショップはうまくいっているという錯覚に陥るんですよ。自分の良いように解釈してしまうため。)

(経営管理大学院 修士1年)

デザインスクールからは、ファシリテーションを実践することがテーマとして挙げられたので、過去のグループワークなどを振り返りながら、できるだけイメージを持って臨んだ。控えめな性格の参加者が多かったので、彼らが意見を自由に言いやすい雰囲気作りと、ある程度の内容にまとめるための時間管理に気を遣った(事前資料はとても参考になった)。

フィールドワークに出る前に目的意識を共有した。場所は一通り決めたが、フィールドに出てからは、融通を利かせた。始めインタビューに躊躇していた参加者が、慣れ始めたらもっと聞きたいというように変わったことがよかった。

ブレストやアイディエーションでは発散と収束のテンポを心がけ、なんとか形にはなっていたと思うが、場づくりをリードする立場にならざるをえなかったことに課題を感じる。控えめな参加者を逆手に、彼ら同士で質問し合って発表してもらうなど、後から考えれば方法があったので、今後に活かしたい。

平本 毅 (経営管理研究部附属経営研究センター・特定講師)

今回はフィールドワークを初日に実施するチーム、二日目に実施するチーム、実施しないチームと、ワークの進め方に大きな違いがみられました。最終発表を聞けなかったため、この進め方の違いが最終的なアウトプットとどう結びついたか/結びつかなかったのかを確認することができなかったのが個人的な心残りです。

各チーム、ザッピングする要領でみてまわりましたが、概ね雰囲気はよかったように思います。京大の学生はファシリテーションを行い、琉大の学生はアイデアを出し、また土地の事情を伝え、土地を案内すると、各々に活躍の場があることがよかったのではないのでしょうか。

一方で、ワークの内容については、考えぬき、調べぬいたうえで実現可能なアイデアを出すことにとらわれて、各チームとも少しやりにくそうにしていたことが印象に残りました。この状況下で、デザイン思考の良い点を活かすには相当の技量が必要になったと思います。

最後に、今回の作業時間はほぼ二日間でしたが、やはりこの持ち時間では、調査とアイデア出し、発表準備以外の「一工夫」(CJMを作るとか、プロトタイピングを行うとか)の時間がとれないことがわかりました。日程の都合には仕方のない面もあるかとは思いますが、

半日くらいの時間を確保することができれば、もう少し各チームのワークの幅が広がったのではないのでしょうか。

笠原 秀一 (学術情報メディアセンター 研究員)

今回のデザインスクールでは、「普天間飛行場の跡地利用」というテーマで二日間議論し、もう一日で那覇市と沖縄市のベンチャー企業・ベンチャー支援団体を見学しました。議論においては、これまでに行われた普天間飛行場の跡地利用の経緯について琉球大学の小野先生が基調講演を行い、残りの時間をグループワークと成果発表に当てています。

議論や作業に費やせる時間が実質二日間と限られていた中、全てのチームが〆切までに各自の提案を資料としてまとめ、プレゼンテーションできたことは大変印象深かったです。しかしながら、跡地利用としてのアイデアとしては新規性に乏しい傾向が見られ、成果に対する沖縄の関係者からの講評は冷静で、想定範囲内と見られていたように思います。これは既に地元で議論が積み重ねられている普天間基地跡地の活用方法というテーマを扱ったため、地元での議論によってアイデアが出尽くしており、ある程度やむを得ないものと思われまふ。私にとっては、こうした既に議論の積み重ねがあるテーマに対して、デザイン学がどのように貢献できるかを考えさせられる契機となりました。

一つのアイデアとして、過去の議論を丁寧にフォローし、制約条件として議論に取り入れる方法を考えています。小野先生の基調講演では、開発が検討されるようになった経緯や地元が重視する価値観、利害関係等の大枠、遵守が必要な法制などが示されており、こうした点を制約条件として議論に取り入れていく方法です。但し、制約条件を固定的に考え、闇雲に取り入れても発想の幅を狭めるだけです。過去の議論を取り入れる場合には、技術によって制約条件を変えられないかなど、制約情報の強弱や可変性の評価が必要と考えています。この場合、提案そのものに新規性が出てくる事は少ないと思われまふが、技術的あるいは制度的な新規性が示せる可能性があると考えています。

中川 智絵 (デザイン学ユニット 特任助教)

デザインスクール in 沖縄では、第6チームの担当となり、主にその活動を見守りました。チームメンバーにはワークショップに不慣れで、少しついてくるのに精一杯の学生もいましたが、その学生を置いて行くことなく、ファシリテーターを初め、他のメンバーが丁寧に質問に答え、意見を聞いていたことが印象的でした。

石田 亨 (情報学研究科 教授)

沖縄でのデザインスクールは回を重ねるにつれて、社会的な課題に向かいつつある。今回は、琉球大学の先生方のイニシャチブで基地問題を扱った。政治的課題と距離を保つために、普天間基地返還後の跡地利用にテーマを絞った。とは言え、センシティブな課題であることに違いはないが、京都に住む我々にはその実感がない。グループに、京大、琉大に加えて、沖縄国際大学の学生が参加していたことが、ワークショップを進める大きな支えとなった。案内された嘉数高台から見下ろした基地の姿、沖縄国際大学の校舎から間近に見えたオス

プレーを忘れることはないだろう。普天間跡地の再開発は数十年も続く事業となる。今後、新聞やテレビで、普天間が取り上げられるたびに、3日間のデザインスクールを思い出すだろう。

十河 卓司 (デザイン学ユニット 准教授)

例年3日間かけて実施しているが、今年は連休がなく2日間+αで実施することになった。京都からの移動もなかなかハードで、金曜日の授業の後に空路でバタバタと那覇入り。いつもは到着後の午後に実施しているオリエンテーションも、今回は機内で資料を配布しただけ。テーマはこれまでで最も難易度の高い、しかしデザインスクールとしていつか取り組んでみたかった沖縄の基地問題。一方で、フィールドワークを有意義なものにするため、今回は事前の講習にフィールドワークのレクチャーを組み込んだ。果たして明日からのワークショップはどうか。

蓋を開けてみれば、2日間という短期間ながら、どのチームも解決策の提案まで何とか漕ぎ着けていた。個人的には、デザインワークショップらしい、もう少し意外なアプローチの提案も期待していたのだが、全体的には無難なアイデアに収まってしまった感があった。問題の大きさと期間の短さからすると致し方ないところか。しかし、学生ファシリテータへの教員のアドバイスの仕方にも、もう一工夫必要かもしれないと感じた。

今回のスクールで、フェンス越しに普天間飛行場を初めて見た。宜野湾市の市民の声もわずかだが直接聞いた。そうして感じられた現実テレビを通して見るものとはまた少し違うように思え、現地に足を運ぶフィールドワークの重要性を改めて実感した。